No. 17
夏休号 1950

FIKO NEWS FLASH

栄光學園新聞部
横浜市中区根岸町船越

スペインへ◆ペレッティ先生御出発◆

一学期の試験のあとで、吉川先生フォーブス先生と別れた僕達に、又も悲しいおとずれがあった。というのは、一年の英語と三年の音楽とを教えておられたペレッティ先生が、栄光を離れて遠くスペインへ旅立たれた事です。

七月十八日の離会で、ペレッティ先生は最後の挨拶された。それによると、先生は七月廿日の真夜中に羽田の飛行場を立たれ、フィリッピンの方を迂回して先生の郷里イタリアに行かれ、そこで少々滞在なさってからスペインに行かれます。この学校も栄光の様に毎日曜日の午前ローマに入ります。その後はまだ未定ですが、恐らくイタリアに三四日位滞在して、又スペインの方へ行くでしょう。目的地はスペインの北の方にある。コミリヤスという大学です。コミリヤスの大学は、栄光と同じく大洋の側に建っている。たゞ、こゝは太平洋で向うは大西洋です。その力ンタブリック海の美しい波や、美しいビスカヤの景色を見て、太平洋とその側に住んでいる、栄光の懐しい君達を思い出すでしょう。あそこで四、五年の間神学を勉強します。神学を勉強します。神学というものは、宗教と宗教に関することの研究ですから、それを勉強している私も、もう少しよい人間になる一方である筈です。その間には、全世界にどんな変化があるか分りません。栄光学園は、まだ長浦の側に堂々と建っているでしょうか。日本もどういうふうに変わるでしょうか。（あんまり変わらないといいが）ヨーロッパのこともどうなるでしょうか。五年すんだら、私達カトリックの司祭などはまだ生きているでしょうか。鉄のカーテンの中のカトリックの人と、ことに修道者はもう何百人となく殺されたり、監獄に入れられたりしました。他に国どういう変化があつても、五年すんだらまた生きていれば、もう一度日本へ飛んで来ます。そのうちに君達は校長先生と副首主任の先生と、外の先生方の御指導に従って、栄光の誇い伝統を作って下さい。そして此の世の中に出て、君達のまわりに住んでいる人々に尊い精神を伝え、その人々を、もう少し幸福にするように最後まで盡して下さい。ではさようなら。（原文通り）

先生に栄光での御感想をお聞きすると、「栄光での月日は非常に早く、又楽しく過ぎ去りました。私はあちらではとても淋しいでしょう。けれど栄光がどれだけすばらしくなるかを想像し、再び日本に来る日を楽しみにしています。」とおっしゃった。

僕達はペレッティ先生の期待に背かぬように、よりよい栄光を築き上げねばならぬのは云う迄もないが、もうあの「オエ・シズカヨ」という音楽的なきまり文句も聞けず、栄光名物の一つ、チコンバイバイに相興ずる事も出来ないかと思うと残念である。

天狗歸國
七月三十一日横浜へ

日本をはなれて三百六十六日目の七月廿一日の午前、ハンス・シュトルテ先生、即ち天狗先生はなつかしの古巣栄光学園へもどってこられた。

船の入港時刻はその朝迄はつきりしなかつたが大体八時半位の予定だつたので、校長、ヘルヴェク両先生は七時半頃学校をジープで出発、そして横浜の波止場の近くの United Line 会社へゆかれた。

そこでヘルヴェク先生が正確な入港時刻を聞きに入って行かれたがやがて、眞赤な顔をしてとび出してこられ、もうとっくに天狗の乗った船はついているといいながらジープに乗られた。

桟橋には約八名の三年や高一の生徒が迎えにきていた。すぐあと、ねぼけまなこをこすりながら向井先生も――。やがて頭まで白い帽子でかくした、白ずくめのいでたちで貨物船（Fleet-Sock）のブリッジよりおりてこられたシュトルテ先生は、やッホーの代りに「何だ、おそいじゃないか。」と文句をいわれた。

先生は大分お肥りになったようであつた。

まず校長先生及びヘルベエク先生と一年振りの握手、その後僕達迎えにきていた者にも、しつかりと握手をしてくださった。船から出たり入ったりして荷物を片づけおわり、やがて修院の自動車で天狗は一年ぶりで栄光へ帰ってこられたのである。

出発に際して
ペ先生メッセージ

来週の木曜と金曜の間の夜十二時頃、羽田飛行場を出発します。一緒に三人のスペイン人と四人の日本人の神学生も、ローマのプロパガンダという大神学校に向って出発します。金曜日午後四時頃、マニラの飛行場に着陸する予定です。要領早く又ローマへと飛び出し、そして日

シュトルテ先生
終生誓願

去る八月十五日は、聖母被昇天祭、聖フランシスコザベリオの來朝記念日の二つの喜びに更にもう一つの大きな喜びの加えられた日であつた。それはシュトルテ神父様と他の二人の神父様が最後の誓願をお立てになられた日であるからである。

当日八時半、ミサ聖祭の時、シュトルテ神父様を始め、二名の神父様は黒い服を召されて祭壇におもむかれた。ミサの中の説教の時フオス神父様は誓願の意味を説明された。

ミサの後、一階合併教室で祝賀会を催した。会場は奇麗に装飾され、正面には聖母像が安置されてあつた。まず一同聖歌を合唱し、その合唱とともに高一A[illegible]君他四名による「富める吉年」の聖史劇があり、一同再び聖歌を合唱。このあと生徒代表として、高一B[illegible]君の祝辞があり、[illegible]君よりシュトルテ神父様に、生徒からの霊的花束が手わたされ、さすがに神父様もうれしそうな御様子であつた。これに答えて柏子と歌声の中に神父様は立たれて答辞をのべられた。こうして十一時すぎに会をおえた。

（誓願については本紙第二号第七号参照）

夏祭

去る七月二十三日（日）午後一時十分より約三時間半にわたって講堂横の建物二階で一週間の苦心を華とさかせて昭和二十五年度の夏祭が興行された。

過去を反省して今年は、各組とも大分頭をひねり、高一・三年の各組は討論会まで行った。

当日は父兄も相当見えて、特に一年ぶりで開られたシュトルテ先生もお見えになっていたので皆大喜びであった。出物の題目はなかなか手がこんでいて、説明をようする様なものが多い。その主な題目を挙げれば、次の通りである。

「模擬店」「仮装行列」「真夏の夜の夢」「当代桃太郎 談」「リズム床壁」「ペイレッツ・ソング」等である。

尚シュトルテ先生校長先生ヘルヴェク先生三人どろいのギター伴奏入り合唱が久しぶりで満せられ、大喝采であった。

又ペレッティ先生は、最後とばかり、お得意のチュンバイを演じた。最後に校歌を歌って、いよいよ本格的な夏休に入った。

海のキャムプ

本校恒例の海のキャムプは、後に山をひかえた浦賀町鴨居のヒュッテで四週間にわたって行われた。七月三十一日から八月五日まで一年A・B（七十名）八月七日から十二日まで二年（九十九名）八月十四日から十九日まで一年C・D（六十六名）八月二十一日から二十六日迄高一、中三（五十八名）と先生方参加があった。

今年のキャムプの特色は参加人員の多い事と、ゴムボートのあった事とであろう。キャムプ長は、一年がヘルヴェク先生、他はシュトルテ先生で、水泳係はウルフ先生の担当であった。

各キャムプとも行事は大体同じだったので、次にまとめて記す。

晴間は午前午後共、二時間から三時間水泳をし、他の自由時間は皆各々の部屋でゲーム等をした。水上陸上の運動会に楽しい一時をすごし又燈台見物も行われた。特に高一中三の時は、燈台の人々の御好意で夜間見物を行う事が出来た。

夜は審判の先生三名の前で、各部屋から一つづつ合唱・独唱を出して競争する歌の会があった。又高一中三の時には、逆に生徒が審判して先生方が一つづつ歌われ、校長先生が一位になられた。これは校長たるためか声が良かった為かは、読者の判断にまかせよう。キャムプに附物の工夫大会は、何によって飲んだり食べたり大騒の中に行われた。今年は特にドレスマン先生による高妙な手品や、班対抗のゲームの競争、吉野先生の星についての話（一C・D）があった。

さて天気の事だが、一・二回目は降ったり止んだりだったが、キャムプ生活には差つかえがなかった。三回目はどうした事か初めから終りまで雲一つなく最後のは比較的よかった。

丹澤キャムプ

シュトルテ先生が渡米前から待ち望んでいた第三回丹沢キャムプは八月二十八日から九月二日まで「丹沢ホーム」という小屋を根拠地として行われた。

リーダーはシュトルテ先生と大甲学園卒・上智大学在学中の熊田さんと曽根さんとで、中三から五名・高一から十名が参加した。

「山を愛し、自然の如く心身共に清かるべし」という山の男の掟にのっとり、朝夕の祈りは勿論、毎朝ミサを捧げ、夕方にはロザリオの祈りを一緒唱え、精神的生活の向上にも力が注がれた。

八月二十八日、大船を七時三十二分に出発、湘南電車で小田原へ、そこから小田急で大秦野駅に着いた。天狗の鼻の威力で運よくバスに乗れることになった。この車用バスで蓑毛まで行き、そこから徒歩でマビツ峠を越えて三時頃札掛の丹沢ホームについた。

八月二十九日、小屋を九時に出発し、塩水川に向い、木馬道に出た。木馬道を少し上り、それから沢登りをし、キョウハ沢・おばけ沢の分岐点まで行った。ここから更に沢登りをしておばけ沢まで行きたかったのだが、四十五度位の傾斜のある新大日東尾根へ敬くぐりして登り、運よく道を発見し、壁根傳いに下山した。小屋についたのは四時頃だった。

八月三十日（雨後晴）午前中休養し、午後一時小屋を出発、たらい小屋沢を沢登りし、明日の蛭ヶ嶽登山に備えて早く切りあげ旧木馬道を通って下山した。

八月三十一日　五時五分、小屋を出発して、宿夜の中をおばけ沢に向った。

おばけ沢についた時にはもやはすっかりはれ、太陽はかなり高く昇っていた。ここで洗面をすませ、三角の頭を経て十時半頃丹沢山頂上へ（海抜一五六七米）に着いた。晴天の半分を食べながら小憩して後、尾根伝いに鬼が岩など経て神奈川県の最高峰蛭ヶ嶽へ（海抜一六七二・六米）に十二時十分着いた。

豊度後、初征服記念写真をとり休む間もなく丹沢山を、塔ヶ嶽（海抜一四九一米）、新大日を経て五時頃小屋についた。

九月一日　休養日　前日の疲れで朝寝坊をしたが、初金曜日のミサを河原で捧げた。

午後、夜間登山に備え、一・二時間の雷雨をした。

晩、営火をかこむ工夫大会を終ってから、天狗様の「我々はこの営火の火の如く熱く、又この沢の水のように清くなければならない」という話と夜間登山の注意があって後、栄光最初の夜間登山が行われた。

午後十時小屋を出発し、本谷川に向った。本谷川を渡ってから巧ち果てた木馬道を懐中電燈をたよりに下り、塩水川にほど近い本谷川の河原で、非常食糧のおやつを食べた。時は九月二日午前〇時五十六分（夏時間）一明日の聖体拝領制限時間までであと四分。

それから本谷川・塩水川の分岐点に至り、丹沢林道を通って二日午前二時四十分小屋についた。

九月二日　八時に起床し、出発に時間を食いすぎたため、十一時に小屋を出発、来た時と同じコースをバスに乗らずに大秦野駅につき、丹沢と別れをつげた。

運動會

来る十月八日、本校最初の運動会が新グランドで行われる。運動会の目的は、体位向上、学校としての団結、朋同一致、スポーツマンシップの涵養にある。

田澤穣氏

（歯科医士、本校三年[redacted]君の厳父）

横須賀平坂ガード下で九月二日の午後十一時三十分頃、自転車衝突事故の為横須賀共済会病院入院、しかし脳内出血、眼部骨折の為介抱のかいもなく四日午前四時死去。四十七歳。

大日午後二時横須賀教会にて、告別式

豆ニュース

★夏休みの間医務室は、壁を明るいクリーム色に塗り変え、絵等も飾られ、大変美しくなった。

★事務館の前の垣根は、この度丈夫な金網がはられ、緑色に塗られた。

★始業迄業を知らせるベルは、今までよく鳴らず、大変不便を感じていた次第であるが、修理の結果、今では大成功である。

★事務所の電気時計も新らしくなった。